

「千葉氏を語る」

「だよい」

会報誌第16号
千葉氏を語る会
事務局
発行日
令和5年
9月19日

第九回総会開かれる

令和五年六月四日(日)午後一時

第九回千葉氏を語る会の総会は、蘇我コミュニティセンター四階多目的ホールにて開催された。

定刻の午後一時、司会者より、本日現在の会員数は六九名、出席者数二五名・委任状数二二名、併せて四七名で全会員数の過半数に達しており、本会規約第八条の規定により本総会は成立いたしますと報告があった。

これにより、丸井敬司副会長より開会の宣言がなされた。

向後 保雄会長の挨拶(要旨)

新型コロナウイルス感染症は、

五月八日から感染法上の位置づけが第2類から第5類に変更された。本総会もいよいよ対面で出来るようになったが、社会経済面ではまだ

まだ元へ戻る様なことはなく、今少し時間がかかると思う。しかし乍らコロナ禍が明けた今、千葉氏を語る会としては、三年後の二〇二六年には千葉開府九〇〇年の諸行事が待っているところである。

それに繋がるものとして、今年成田山の祇園祭、また、多古町のあじさい祭りなどでは、甲冑を着て行進をする予定と聞いている。

そこに向けての行事への参加等、会としての諸活動への思い、察するところである。

今年も皆さんの協力のもと、本会が千葉開府九〇〇年に向けて活動されていくことを祈念する。

議長には当会副会長の鷺見隆仁氏を選任する。

議長の選任

鷺見議長は、各議案担当の役員を指名しそれぞれに報告を求めた。

議長には当会副会長の鷺見隆仁氏を選任する。

議事

○報告議案

- 第一号議案 令和四年度 事業報告
- 第二号議案 令和四年度 決算報告
- 第三号議案 令和四年度 監査報告
- 第一号〜第三号議案の報告・説明の後、一括して質疑をもとめた

が、異議なく原案のとおり承認された。

○協議議案

- 第一号議案 令和五年度 事業計画案
- 第二号議案 令和五年度 収支予算案
- 第三号議案 令和五年度 役員改選案
- 第一号〜第三号協議議案の説明の後、一括して質疑を求めたが、異議なく原案のとおり承認された。

○規約改定案

引き続き発足時以来の規約の改定案について、日向事務局長より説明があり、全文異議なく承認された。

以上で議案審議の全てが終了し、議長は総会の終了を宣言した。

続いて、当会 丸井敬司副会長による演題「東北千葉氏のルーツを探る(一関千葉氏と気仙千葉氏)」の記念講演が行われた。

講演に入る前に千葉市長 神谷俊一様からのお祝いのメッセージが都市アイデンティティ推進課長 上坊寺 貴明様から披露された。

本日は、本市のまちの礎を築いた「千葉一族」を祖とする東北千葉氏をテーマに記念講演会が開催されますこと、心からお祝い申し上げます。

本日お話のある気仙千葉氏の拠点であった陸前高田市は、現在千葉ロッテマリーンズで活躍する佐々木朗希選手の出身地でもあります。このように本市とゆかりの深い地で活躍した東北千葉氏のルーツや、本市の歴史に親しむ機会を提供いただきましたことは、3年後の千葉開府900年を控える中で誠に喜ばしく、意義深いものと存じます。開催にご尽力されました皆様にご挨拶を申し上げますとともに、会のご活躍、ご健勝をお祈りいたします。

令和5年6月4日

千葉市長 神谷 俊一

東北千葉氏のルーツを探る

(奥州合戦と気仙千葉氏・

一関千葉氏の成立について)

千葉氏を語る会副会長・文学博士

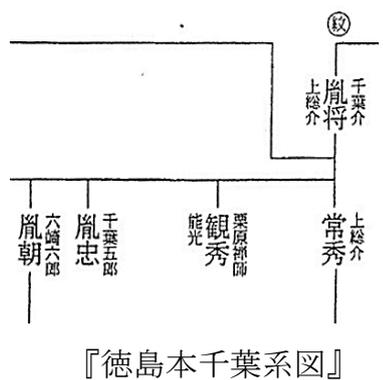
丸井敬司

令和五年六月四日、千葉市蘇我コミュニティセンターの4階の講堂において「千葉氏を語る会」の総会に伴う講演会が行われました。筆者は、この講演の講師として招かれましたが、本稿は、この時の話の内容の要旨をまとめたものです。

本日の話は、陸前地方の千葉氏の伝承の中でも私と縁の深い陸前高田市の「気仙千葉氏」と「一関千葉氏」の二つのルーツについて一定の研究成果が得られたので、この二氏についてお話をさせていただきます。まず、最初は一関千葉氏についてお話を致します、

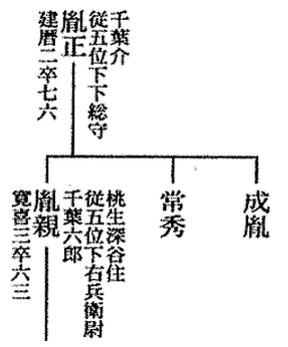
東北地方、特に宮城県の千葉氏の系図によりますと、この一族の祖とされているのは常胤の孫、胤正の六男で、胤親とされています。この胤親については、比較的信頼性の高いとされる「矢作千葉氏」の系図(以下『矢作系図』)という)と千葉氏の系

図の中では成立が鎌倉時代中期に遡る『徳島本千葉系図』を比較・検討しました。



『徳島本千葉系図』

『矢作系図』では、その祖となる人物は千葉胤正の子で、千葉六郎胤親とされています。この胤正の子とされた胤親の名は『千葉大系図』、『徳島本千葉系図』など千葉氏の諸系図では、確認できませんが、名前が、変わることは中世には、珍しいことではないので、今回は「名前」以外の共通点の有る人物を『徳島本千葉系図』の中で探すことにしました。この結果、胤正の六男で、六郎と称していた胤朝がいることが分かりました。この胤朝には「六浦六郎」以外の添書がありませんが、その子の名前は不明とされ、添書きには「兵衛尉」と書かれています。



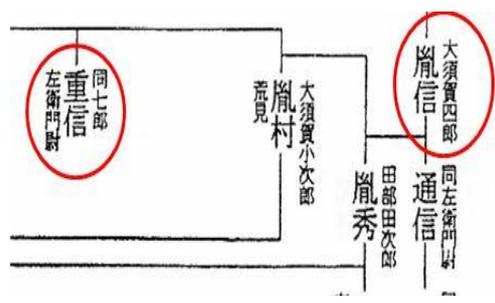
『矢作系図』)

また、孫の名前も不明とされ、「兵衛太郎」と添書がされています。しかし、千葉家の本家で名前が不明となっている一族に「兵衛尉」という職が朝廷から与えられることは不自然で、これは、父親の称号を継承したものとして同系図に書入れられたと思います。

さて、胤朝が兵衛尉に任官していたとされると両者は①常胤の孫、②六郎、③兵衛尉という三点の条件で符合することになり、気仙千葉氏のルーツは千葉胤朝としてよいと思います。

一関千葉氏は一関市東山町を拠点として発展した東北千葉氏です。その祖とされる千葉頼胤が建立した寺院の後身とされる東山町の城高山安養寺には頼胤が祀ら

れており、現在もその供養が続けられています。頼胤は一関千葉氏の系図である『長坂千葉氏系図』によると常胤の「七男」とされ、官位は「左衛門尉」とされています。また、その戒名は「蓮清院前羽林字正山大居士」で、建長2年(1250)10月1日に亡くなったとされています。

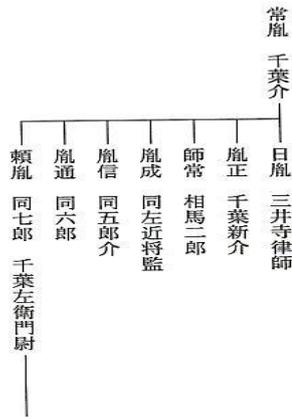


『徳島本千葉系図』 (丸井制作)

この頼胤が常胤の子であり、建長2年に亡くなったとする、亡くなった時の年齢は百歳以上となります。これから考えると頼胤は子の世代ではなく、

常胤の孫の世代の人物であったことがわかります。

この結果この結果から考えると同系図は、近世の初頭、長坂家に伝わった頼胤を初代とする『旧長坂千葉氏系図』と下総の『千葉氏系図』を合成して作られたもので、その際、頼胤を常胤の子とし錯誤したものと思われる。



『城高山史』の『長坂千葉系』

- さて、頼胤を一関千葉氏の初代とする8と、その特徴は①常胤の孫、②七郎、③左衛門尉、④頼胤の代に東北地方に移住。

の四点となりますが、この条件に合う人物を『徳島本千葉系図』の常胤の孫の中から探すと大須賀胤信の子重信が浮かび上がります。重信は、『長坂千葉氏系図』の頼胤の①②③の3つの条件に一致するだけではなく、『吾妻鏡』宝治(1247)6月22日の条によれば、宝治合戦で三浦義村に味方したため北条氏より追討を受けた後、行方不明となりました(『吾妻鏡』宝治元年(1247)6月22日の条)。これが、重信の東北移住を意味すると考えると『長坂千葉氏系図』の頼胤は『徳島本千葉系図』の重信と四つの特徴で一致します。こうした検討結果から『長坂千葉氏系図』の頼胤は『徳島本千葉系図』の重信の名前が変わったもので、この一族のルーツは大須賀重信ということとなります。

果、東北千葉氏のルーツを特定することに成功しました。本日のお話は、これで終了させていただきます。ご清聴ありがとうございました。ごさいました。

文中の小文字数字の項解説

- 1「矢作千葉氏は」気仙千葉氏の氏族。この一族には家紋を「八曜紋」とするなど鎌倉時代に遡る古い紋を現在でも使用するなど気仙千葉氏の成り立ちの資料を継承している。
- 2「宮城県史」に収録。
- 3「徳島本千葉系図」は蒙古襲来の際、千葉介頼胤が千葉で作成し、九州に運んだもの。原本は遺失したが、その写しが現存する。
- 4佐倉市六浦。当初、胤朝は下総の六浦を所領として与えられた。
- 5安養寺に残っている記録の中で「大居士」とされているのが頼胤と広朝しいかない(『安養寺史考』)ことから、この二人は安養寺やその前身の寺院では開山と同様に考えられていたと思われる。
- 6「長坂千葉氏系図」は一関千葉氏の惣領家の子孫とされる

千葉揆一氏所蔵の系図。

- 7常胤の子胤正が亡くなった年は建仁3年(1203・63歳)で、これから逆算すると生まれたのは1140年となり、その弟たちも1140〜50年ころとなる。この計算によれば頼胤が常胤の子となると亡くなった時には百歳以上となる(『本土寺過去』・『徳島系図』などによる)。
- 8長坂家には、『矢作系図』のような頼胤を初代とする系図があり、これが近世になって千葉氏の系図の常胤の子の胤頼と混同して『長坂千葉氏系図』が作られたものと考えられる。
- 9重信は、北条氏による探索の前に東北地方の東山町に逃れたものと思われる。名を変えたのはこの時であろう。



この間、師常は鶴岡八幡宮や永福寺、相模日向山、さらには信濃善光寺に参詣する頼朝に供奉するとともに、建久元年(一一九〇)十一月および同六年三月には、頼朝に従つて上洛している。

また、父常胤とともに、頼朝の子頼家の御七夜や着甲始めの儀に参列するだけでなく、「坑飯」役や馬引きなど、後の御家人役ともいふべき役目を負っている。

なお、頼朝と師常の間には、次のような逸話が残されている。

流人時代の頼朝は、伊豆の伊東祐親の三女と通じていたが、後に彼女を呼び出し面会した折、「列座したる大名の中に、誰を夫となさんと思うか、指して仰せ出されよ」と問いかけたところ、三女は一人の侍を指した。

頼朝は、三女に「侍、その数多しといへども、日の本の將軍と号する千葉介常胤の次男、相馬の次郎師常とは是れなり」と言い、師常に対しては「頼朝をば舅と思はるべし、頼朝は婿と思ふべし」と納得させたというのである。

「吾妻鏡」には相馬師常は 元久二年(一一一〇)十一月、幕府の重鎮畠山重忠が北条時政によつて忙殺されるなか、念仏の行者として端座、合掌して没した(六十七歳)

とある。それは、北条氏の中心が時政から義時主導の幕政が展開しようとする時でもあった。

三・鎌倉の屋敷

師常の鎌倉の屋敷は、鎌倉市今小路にあつた千葉常胤の屋敷の北側に、建久三年(一一九二)に師常が勧請したと伝えられる「相馬天王社」が鎮座しているが、この常胤邸と相馬天王社とのあいだ、巽神社の向かい側にあつたといわれる。

またその近くには、師常の墓所と伝えられる「やぐら」内に五輪塔が現存する。

四・その後の相馬氏

師常の子には義胤、常家、行常などがあつたが、所領の大部分は義胤が継承したものと考えられる。

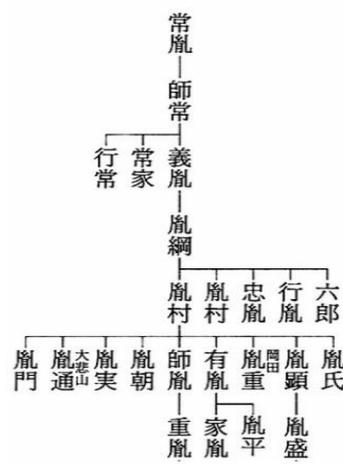
義胤の子の胤綱や孫の胤村の代で多くの庶子家に分かれた。

胤村の所領は九人の子に分与されたが、このうち、長子の胤氏が下総国相馬郡内の所領を継承し、次男の胤頭が行方郡岡田を分与された。しかし、最多の所領を与えられたのは五男の師胤で、行方郡の大部分と下総の相馬郡内の所領を継承した。師胤の所領は子の重胤に継承されるが、重胤は元亨二年(一二三二)奥州行方郡に移住し、これ

以降この一族は、奥州相馬氏と呼ばれるようになる。

下総に残つた相馬氏は、後に鎌倉(古河)公方家の被官となり、さらに小田原北条氏の支配に組み込まれた。北条氏の滅亡後、小田原藩大久保家や彦根藩井伊家の家臣として存続した。

一方奥州相馬氏は中世の争乱を生き抜き奥州の雄藩に成長していった。



天正十八年(一五九〇)、一六代相馬義胤は小田原合戦に参陣し、豊臣秀吉から宇多、行方、標葉三郡四万八〇〇石が安堵され近世を迎えた。

奥州相馬氏は鎌倉時代から江戸時代末期にいたる六世紀にわたる、継続しておなじ領地を保持した稀有の一族である。

他にこのような例は、九州薩摩の島津氏と人吉の相良氏、奥州の南

部氏があるにすぎない。

(注)この源義宗は別にもう一人いて、八条院に仕えていた兵衛尉の官歴をもつ「京武者」で、前九年合戦で活躍した頼義の弟頼清の子孫であるとの説である。

相馬師常

「相馬家歴代藩主像」より



事業活動状況

(今期 2023 年 4 月～ 8 月)

開催日	事業名	会場・参加人数	演題・講師名
4/18	74回 勉強会	きぼーる活動室 45名	演題：多古の歴史朔両総平氏から千葉氏へ藝 講師：野村 康裕（会員）
5/16	75回 勉強会	ハーモニープラザ分館 32名	演題 朔我こそは嫡流なり 羽千葉氏にみる兄弟、従兄の関係藝 講師：百瀬 一郎氏
6/4	第9回総会 記念講演	蘇我コミュニティセンター 55名	総会：提案議案は全て原案通り承認 演題：東北千葉氏のルーツを探る 講師：丸井 敬司副会長
6/18	歴史文化 シンポジウム 羽2023	千葉県教育会館 24名、一般他123名 (千葉氏顕彰会への協賛)	演題：上総氏と千葉氏 講師：川尻秋生氏・峯島英寿氏・濱名徳順氏 3名の方々の講演とシンポジウム
7/18	76回 勉強会	ハーモニープラザ分館 38名	演題：我こそは嫡流なり（5/16勉強会の続き） 講師：百瀬 一郎氏

事業活動予定

(2023 年 9 月～2024 年 3 月)

9月中旬	会報16号発行		
9/19	77回 勉強会	ハーモニープラザ分館	演題：上総介とその時代を考える 講師：(会員)高野利太郎
10月～ R6/3月	定期勉強会 史跡見学会	詳細未定	
R6/2月	会報17号発行予定		

お期待せしました、会報誌十六号をお届けします。
 今回号では、令和五年六月四日第九回総会開催実施と同日開催されました丸井副会長の記念講演「東北千葉氏ルーツ」の概説を掲載しました。
 また会員山内博さんの投稿で千葉常胤次男相馬師常の相馬氏の盛衰についての記事を掲載しました。
 皆様のご協力ありがとうございました。

編集後記 編集子

